

活動報告（令和元年）

1 戦史関連研究会等

(1) 戦争史研究国際フォーラム

防衛研究所の主要行事である戦争史研究国際フォーラムは、今年度のテーマを「紛争の想定外の拡大」とした。一定の計画と構想に基づいて開始された武力紛争、あるいは個別の作戦が、想定外の規模に発展してしまう例は稀ではない。そのような事態にどのように対処すればよいのかという問題は、各国が普段から検討しなければならない重要な課題である。今年度は、武力紛争が想定外に拡大した事例をいくつか取り上げ、紛争の管理についての理解を深めることをめざした。

| | | | |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----|-----------|
| 題 目 | 紛争の想定外の拡大 | | |
| 実 施 日 | 令和元年 9 月 17 日 (火) | 場 所 | ホテル椿山荘 東京 |
| 基調講演 | 「軍事戦略と紛争の想定外の拡大」 スティーブン・バズィー（英ウォルヴァーハンプトン大学教授） | | |
| 研究発表 | 第1セッション 「戦争の拡大」 「日中戦争の拡大と日本陸軍——1937年7月～1938年10月」 戸部良一（防衛大学校名誉教授） 『不意打ち』に驚かされることを嫌った将軍 ——ダグラス・マッカーサーと朝鮮半島、1950～1951年」 アラン・ミレット（米ニューオーリンズ大学教授） 「戦争の要請に応じて——オーストラリア陸軍とベトナム戦争」 アルバート・パラッツォ（豪陸軍研究センター長） コメント 花田智之（防衛研究所戦史研究センター主任研究官） | | |
| 研究発表 | 第2セッション 「作戦の拡大」 「1915-16年のガリポリ作戦におけるイギリス軍の想定外の医療危機」 フィロミーナ・バズィー（英ウォルヴァーハンプトン大学教授） 「南太平洋における日本の作戦——1942～43年」 進藤裕之（防衛研究所戦史研究センター主任研究官） | | |

| | |
|--|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>「破滅の拒絶——ドイツ統帥部とソ連における攻勢の失敗 1941 年秋」 ジェファリー・メガーギー（米国立ホロコースト記念博物館） コメント 齋藤達志（防衛研究所戦史研究センター所員）</p> |
|--|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

基調講演では、スティーブン・バズィー教授（以下 S・バズィー教授）が「軍事戦略と紛争の想定外の拡大」と題する研究報告を行った。S・バズィー教授は、戦争には予想可能なことなど何も無いが、全く予想がつかないこともほとんど無いとし、20 世紀以降の近代的な軍隊による、戦争レベルと作戦レベルでの紛争の拡大に関する事例について概観した。紛争の想定外の拡大をもたらす重要な要因として、交戦国の突然の増減、地形や気象等の自然現象の影響、作戦レベルでの予想外の勝利（敗北）を挙げ、このような紛争の拡大に対処するための最も重要な要素として、相手を凌駕する十分な量の兵力の確保、宣伝工作、訓練、武器の製造等の戦力造成を挙げ、そのための事前の準備の重要性ととともに、武器製造よりも兵士の訓練に要する時間の方がより大きな影響を及ぼすと評価した。

なお、今年度フォーラムの聴講者は、防衛省内外合わせて 238 名であった。

また、平成 31 年 1 月 30 日には、例年防衛研究所が開催している「安全保障国際シンポジウム」と「戦争史研究国際フォーラム」をひとつにまとめ、平成 30 年度国際シンポジウム「新しい戦略環境と陸上防衛力の役割」をホテル椿山荘東京（東京都新宿区）にて実施した。

（2）日独戦史研究交流

6 月 25 日から同 27 日の 3 日間、ドイツのポツダム市内において、ドイツ連邦軍軍事史・社会科学研究所（ZMSBw）の主催による国際軍事史会議が開催され、同研究所の招聘により、戦史研究センター戦史研究室の阿部昌平主任研究官と国際紛争史研究室の福原弘教主任研究官が参加した。

ドイツ連邦軍軍事史・社会科学研究所は、ドイツ連邦軍軍事史研究所（MGFA）が、2013 年に連邦軍社会科学研究所と統合して生まれた、連邦軍のための軍事史の基礎研究や軍事社会学、安全保障に関する研究を行う連邦軍の部門別研究機関の一つである。特に、第一次世界大戦及び第二次世界大戦、連邦共和国及び民主共和国の軍事史に焦点を当て、軍、政府、社会、経済、文化などの相互関係に重点をおいた研究が特色であり、約 60 名の研究員を含む約 120 人の職員から構成されている。2016 年に同研究所のマック所長（当時）以下 3 名が防衛研究所を訪問し、戦史研究センターと研究交流を開始した。

会議は、主要テーマを「大戦の終結——軍事思考及び軍事計画に対するそのインパクト」

と設定して、「戦勝国」「敗戦国」「小国家及び新興国家」からなる3つのセクションに分けて発表、その後、セクションごとに質疑応答という流れで構成されていた。

戦史研究室の阿部主任研究官が「第一次世界大戦が日本陸軍に与えた戦術上の影響」(Impact of WW I on the tactical development of Imperial Japanese Army)を発表、第一次世界大戦の欧州各国の戦訓が日本陸軍の戦術に及ぼした影響について大正7年から昭和15年までの5回の歩兵操典の改訂に沿って説明した。この発表に対してフロアからは、日本における戦車の運用に関する検討の状況、旧軍から現代に至る陸軍(陸上自衛隊)における指揮統制に関する考え方(コマンド・カルチャー)、日露戦争の教訓と第一次世界大戦の教訓の関係に関する質問がなされ、戦車の運用については第二次世界大戦までは基本的にフランスの影響が大きかったこと、指揮統制は分権的な考え方であること、日露戦争の教訓は第一次世界大戦の教訓の解釈に大きな影響を及ぼしたことを回答した。

(3) 日独戦史共同研究

令和元年度から同3年度までの計画で、ドイツ連邦軍軍事史・社会科学研究所(ZMSBw)との間で、「20世紀の戦争と安全保障問題——日本とドイツの比較研究」をテーマとして共同研究を開始した。ドイツ連邦軍軍事史・社会科学研究所は、軍事史・戦史研究の分野におけるドイツ最大の研究機関である。本事業は、日本とドイツに共通する20世紀の戦争及び安全保障問題について比較研究を実施することで、戦争史全般に対する共通の理解を深めることを目的としている。今年度は、9月にドイツより研究者3名を招へい、11月に日本から研究者2名を派遣し、共同研究ワークショップを開催した。これらのワークショップにより、日独双方の研究領域・関心領域などを確認することができた。なお共同研究の成果は、最終年度に出版する計画である。

今年度実施したワークショップは、以下の通りである。

○第1回日独共同研究ワークショップ(於 東京)

| 月 日 | 発表テーマ |
|---------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 9月4日(水) | 第一次世界大戦と日本 石津朋之戦史研究センター長 戦争と平和の間——戦争の社会の全体化 フランク・ライヒヘルツァー学術研究員 ハインツ・グーデリアン将軍とドイツ機甲部隊の発展 1935-1945 マルクス・ペールマン学術研究員 |

| | |
|---------|--------------------------------------------------------------------------------|
| 9月5日(木) | 第二次世界大戦におけるドイツの海洋戦略 ミヒャエル・エプケンハンス研究部長 太平洋戦争の終結——日本のパースペクティブ 庄司潤一郎研究幹事 |
|---------|--------------------------------------------------------------------------------|

○第2回日独共同研究ワークショップ(於 ポツダム)

| 月 日 | 発表テーマ |
|-----------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 11月19日(火) | 兵営都市ポツダム——都市における戦争 ヘレーネ・ヘルト研究員(連邦軍中尉) |
| 11月20日(水) | 鉄兜団(“Stahhelm”)——二〇世紀ドイツにおける右翼運動 デニス・ヴェルバーク 陸軍士官学校教官(連邦軍大尉) 軍事的効率性とはなにか?——武装親衛隊(Waffen-SS)の事例研究 クリス・ヘルメツケ研究員(連邦軍少佐) アーカイブズから見た日独関係史 フランク・ケーザー学術研究員 「北進論」再考——日本陸軍の戦略と極東における国際情報戦 清水亮太郎主任研究官 |
| | 総合討議 「第二次世界大戦再考——地域・グローバル化の視点から」 (上記発表者に加えドイツ側主要研究員が参加) |

なお、第2回ワークショップには、日本側から清水戦史研究室主任研究官に加え、山田雄一郎国際紛争史研究室所員(3陸佐)が参加した。

(4) 日韓戦史研究交流

令和元年10月30日、防衛研究所において第20回日韓戦史研究交流会が開催され、韓国側からは、韓国国防部軍史編纂研究所の鄭炯兒先任研究員、李美淑先任研究員の2名が参加した。日本側は、史料室の菅野直樹室長が司会を、戦史研究室の清水亮太郎主任研究官、山口真司所員が発表者及びコメンテーターを務めた。

研究発表会は、冒頭、石津朋之戦史研究センター長が開会の挨拶を述べ、菅野室長の進行により実施された。第1セッションでは、清水主任研究官が『満洲国』とアメリカ—1930年代の産業開発計画をめぐって』をテーマとして発表し、予定時間を消化した。第2セッションでは、鄭先任研究員が「ソ連の満州敵産搬出と米中の対応(1945-1946)」をテー

戦史研究年報 第23号

マとして発表し、清水主任研究官が米国の中国東北地域に対する関心という観点からコメントと質問を行った。第3セッションでは、山口所員が「太平洋戦争終末期の日本本土防衛—南九州を中心に」をテーマとして発表し、李前任研究員が太平洋戦争末期における日本側の戦略等に着目しコメントと質問を行った。第4セッションでは、李前任研究員が「太平洋戦争に対する北朝鮮の認識—北朝鮮資料を中心に」をテーマとして発表し、山口所員が北朝鮮の太平洋戦争観といった観点からのコメント及び質問を行った。最後の総合討議において、第1セッションで実施できなかった清水主任研究官に対する鄭前任研究員のコメントと質問等が行われた。

(5) 日露戦史研究交流

令和元年9月26日から27日までの間、ロシア科学アカデミー東洋学研究所が主催した国際会議「ハルハ河戦争（ノモンハン事件）での勝利—歴史的事実の追求」がモスクワ市内で開催され、戦史研究室の花田智之主任研究官が参加・発表した。本会議は、ノモンハン事件80周年を記念して開催されたもので、日本、ロシア、モンゴル国、中国から40人程度が参加し、日本からは花田主任研究官のほか、田中克彦名誉教授（一橋大学）や下斗米伸夫特別招聘教授（神奈川大学）らが参加した。

花田主任研究官の発表「ノモンハン事件における紛争のエスカレーションと日ソ両国の戦争指導」は、26日午後のセッションにおいて実施された。同発表は、日ソ両国の戦史関連史料を用いながら、紛争のエスカレーションという観点からノモンハン事件を見直すことで、日ソ両国の戦争指導を分析した。具体的には、日本側の参謀本部と関東軍、ソ連側の赤軍参謀本部と第1軍集団との間に内在していた、ノモンハン事件をめぐる中央と現地での認識の相違（軍事戦略・作戦方針）に注目した。結論では、日本陸軍と同様、ソ連軍にも中央と現地で戦争指導をめぐる対立が存在したことを明らかにした。

(6) 研究会

| 実施日 | 題 目 | 講 演 者 |
|--------------|----------------------|----------------------------------|
| 2月19日 (火) | 戦争は消滅しつつあるのか—戦争の将来像 | イスラエル・テルアビブ大学・社会科学部教授 アザー・ガット |
| 2月20日 (水) | 戦争と技術革命 | |
| 2月21日 (木) | なぜ対反乱戦争（COIN）は失敗するのか | |

| | | |
|---------------|---------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| 3月12日 (火) | 湾岸戦争航空戦の計画及び実行 | ミッチェル・エアロスペース・パワー研究所所長（退役米空軍中将） |
| 3月13日 (水) | 進化する技術と21世紀の戦争—『コンバット・クラウド』 | デイヴィッド・A・デプチュラ |
| 3月14日 (木) | エア・パワーの将来—実践的評価 | |
| 10月1日 (火) | 失われた古代戦の叡智—銃火器以前の戦争 | ロンドン大学キングス・カレッジ教授 |
| 10月2日 (水) | 空の戦争—第2次世界大戦(1939-1945)における連合国の勝因 | フィリップ・セイビン |
| 10月3日 (木) | ウォーゲームの将来—戦略・戦術における見識の源として | |
| 12月5日 (木) | 日澳防衛交流150年 | オーストリア陸軍国防省 監査部長（陸軍准将） ハラルド・ペッヒャー 海陽学園海陽中学校ハウスマスター総括（元陸将補） 富樫勝行 |
| 12月17日 (火) | 中国近代外交の展開—袁世凱から顧維均へ | ペンシルヴェニア大学歴史学部教授 |
| 12月18日 (水) | 近代的条約システムのなかの日本・中国—ターニングポイントとしての1925年 | アーサー・ウォルドロン |
| 12月19日 (木) | 日本に対する中国の挑戦 | |

2 戦後史関連の戦史史料編さん

戦後史関連の戦史史料編さんは、オーラル・ヒストリー（口述記録の作成）の編さんに取り組んでおり、本年度末に①「日本の安全保障と防衛力（その6）：元陸上幕僚長・富澤暉氏」、②「日本の安全保障と防衛力（その7）：元防衛事務次官・日吉章氏」の刊行を予定している。

3 戦史史料の閲覧

防衛研究所は、旧陸海軍関係の公文書、非公文書及びそれらの複製物（以下、「史料」という。）を、平日9時から16時30分まで、戦史研究センター史料閲覧室において一般に公開している。

調査研究のために閲覧を希望する者は、所定の手続きをとって誰でも閲覧することができる。閲覧方法については、防衛研究所史料閲覧室のホームページ（http://www.nids.mod.go.jp/military_archives/）を参照。また、一部の史料については本ホームページから閲覧が可能となっている。

令和元年の閲覧者総数は2,422名であり、月別閲覧者数は下表のとおりである。

| | | | | |
|------|-----|-----|-----|-----|
| 月 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 閲覧者数 | 167 | 205 | 159 | 195 |
| 月 | 5 | 6 | 7 | 8 |
| 閲覧者数 | 162 | 167 | 231 | 274 |
| 月 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| 閲覧者数 | 246 | 212 | 191 | 213 |

4 レファレンス

防衛研究所は、主に戦史研究センター史料閲覧室を窓口として、史料の検索、特定の史料の内容に関する情報提供、史料に関する参考文献及び専門的調査機関等に関する情報提供を行っている。

令和元年のレファレンス統計は下記のとおりである。

(1) 要求件数

総件数は1,490件であった。月別件数は下表のとおりである。

| | | | | |
|------|-----|-----|-----|-----|
| 月 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 要求件数 | 115 | 121 | 155 | 116 |
| 月 | 5 | 6 | 7 | 8 |
| 要求件数 | 110 | 123 | 145 | 167 |
| 月 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| 要求件数 | 116 | 98 | 108 | 116 |

(2) 海外からの要求件数

総件数は16件（閲覧者数含む）であった。

| | | | | |
|------|---------|------|------|----|
| 国 | タイ | モンゴル | 韓国 | 中国 |
| 要求件数 | 2 | 2 | 2 | 2 |
| 国 | オーストラリア | アメリカ | イギリス | |
| 要求件数 | 1 | 5 | 2 | |

(3) 質問内容

| | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|------|
| 質問内容 | 戦争指導 | 作戦戦闘 | 部隊史 | 個人歴 | 制度 | 兵器 |
| 要求件数 | 15 | 68 | 283 | 407 | 70 | 69 |
| 質問内容 | 軍事施設 | 服装記章 | 教範用語 | 教育訓練 | 情報 | 兵站補給 |
| 要求件数 | 92 | 15 | 38 | 40 | 4 | 3 |
| 質問内容 | 研究開発 | 史料 | 自衛隊史 | 戦史叢書 | 外国戦史 | その他 |
| 要求件数 | 3 | 240 | 2 | 14 | 5 | 122 |

(4) 陸海軍別

| | | | | |
|------|-----|-----|-----|-----|
| 国 | 陸軍 | 海軍 | 共通 | その他 |
| 要求件数 | 876 | 338 | 182 | 94 |